

南知多町天神山遺跡の 調査メモについて

小澤一弘 *・川添和暁

* 愛知県埋蔵文化財センター専門委員

南知多町所在の天神山遺跡は、縄文時代早期末土器の標識遺跡として広く知られている。天神山遺跡の調査は知多半島で最も早い時期に行われた学術調査であったこともあり、調査の内容については文字記載で示されているもののみであった。この度、調査当時のメモを報告することによって、その記載内容を模式図として確認することができた。この情報により、天神山遺跡の堆積状況を可視的に検討できるとともに、今後、出土状況を勘案して遺物検討ができるものと期待されるものである。

1. はじめに

半世紀も前の天神山遺跡発掘調査の土層が書かれた3枚の切り取られた野帳片について、本稿に入る前に、その経緯を回顧する。

昭和53（1978）年、名古屋大学考古学研究室で、樋崎彰一先生の指導により、天神山遺跡の整理に入った最初に土偶を見た時の感激と、これがおせんべい土器かとその薄さと緻密に焼きしまった土器片を見て驚いたことを今でも記憶している。

整理用の木箱に入った入海式、石山式、天神山式の土器片、新聞紙に包まれた魚骨（マグロやタイの椎骨）の出土品を、土器片については分類と厚みをラベル毎に計測していた。

陳列室で学生と整理をしていた時に、大参義一先生より、「澄田正一先生より預かったもので、役にたつのでは」と野帳を切り取った3

枚のメモを手渡された。メモには天神山遺跡発掘調査の土層概略図が書かれていた。

また名古屋市博物館で昭和57（1982）年『東海の縄文時代』が開催されたが、開催前に、整理中の天神山遺跡の土器の中で、ほぼ完形品になる深鉢を安達厚三氏に見せると、みずから復元すると持っていたいから、展示されたことが懐かしく想いだされる（図1）。

結果的に続けていた整理が頓挫、整理は終了することもなく、遺跡にとって重要な記録の土層概略図が手元に残ったが、この野帳のメモのことは30年近くまったく忘れていたのである。

退職、センターを離れる時に、天神山遺跡の重要性を考える時、手元にある土層図を、今後公表する機会の可能性がある川添和暁に託したのが今回の発端でもあった。

天神山遺跡の発掘調査関係者でもあった紅村弘氏を江崎武氏の紹介により平成28（2016）年1月26日3名で紅村邸を訪ね、当時の話を

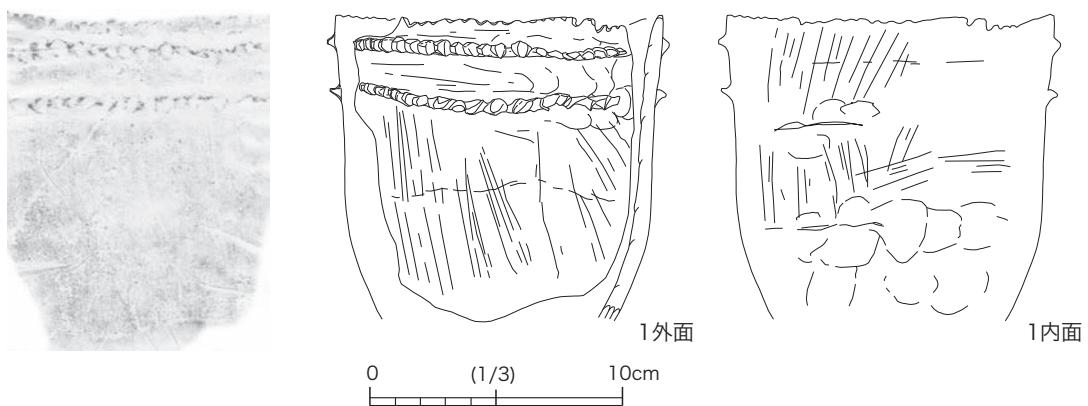


図1 天神山遺跡出土入海I式土器（名古屋大学文学研究科考古学研究室蔵）

聞く機会を得た。その後、岩野見司先生が調査に参加されていたことを知り平成28年4月30日に荒木集成館において当時の話を聞き写真を見せていただいた。

かつて愛知県埋蔵文化財センターの理事・専門委員としてご指導いただいた鬼籍の澄田正一先生、樋崎彰一先生、大参義一先生に関わるこのメモをセンターの紀要で公表するのも不思議な巡り合わせである。これを期に今後天神山遺跡の研究が進展することを期待しています。

(小澤一弘)

2. 天神山遺跡について

天神山遺跡は、愛知県知多郡南知多町大字大井に所在する、大井漁港側の南東方向へと延びる細長い丘陵端部上に立地する。天神山遺跡は、この丘陵端部でも標高15m前後の西側傾斜地に位置し、東側傾斜地には天神山B地点が、北東側約100mの東側傾斜地には塩屋遺跡が位置する。これらの遺跡は、同一丘陵上に近接して群をなしており、2kmほど南にある新津遺跡・同（第2地点）・同（第4地点）も同様のあり方を呈している。

天神山遺跡はかつては入道遺跡として紹介されていた（磯崎・杉崎・久永 1965）。遺跡の発見は、昭和30（1955）年4月に地元在住の上田公治・山本善輔らによって遺物採集されたことによる。同年8月に、上田・立松宏・樋崎彰一により1m²の試掘調査が実施され、翌昭和31（1956）年1月に上田・樋崎・立松・紅村弘らにより発掘調査が行われた。調査は、凹地のほぼ中央部の上方に第Iトレント、その下方南寄りに第IIトレントが、それぞれ長さ8m・幅1.5mで東西方向に設定された（岩野 2002）。

1956年の調査では、土器・土製品・石器・骨角器*・獸骨・魚骨が出土しており、現在も名古屋大学文学研究科考古学研究室をはじめ、南知多町教育委員会・愛知県陶磁美術館で遺物が収蔵されている。ところが調査時の図面類は、現在所在不明となっており、当時の調査方法などは、上述したような文字記載のみが知られる

* 骨角器については、別稿で取り上げたので、参考にされたい（川添 2018）。

程度であった。

このような状況にあって、本稿で紹介する調査メモの存在は極めて貴重な情報と考え、まずはこの内容を報告することにした。



図2 天神山遺跡と周辺の縄文時代の遺跡（赤色の遺跡位置が縄文時代早期の遺跡位置）
明治24年陸地測量部「師崎」より



図3 天神山遺跡全景写真（紅村 1963 より）

3. 天神山遺跡調査メモについて

図4・図5に、野帳に記された調査メモの全ページを掲載した。調査メモは7枚分14頁あるが、白紙頁が2頁分があるので、実際には12頁に記載がなされている。平成27(2015)年に実見した際には、3部に綴じられており(図4左上)、さらにクリップで一つにまとめられていた。7枚分それぞれには紙の片面にNo.が記されていた。調査メモの順番を示すもので、記載内容からして、すべてが綴られた順番を示している可能性がある。調査メモの主な記載は黒鉛筆が主で赤鉛筆も用いてられている。これらは筆跡などから同一人物によるものと考えられる*。一方、No.の記載はインクペンによるもので、同じインクで「30年」と記載されているものもある。No.は遺跡や内容による順番ではなく、もともとは記載年別に付された(あとで整理された)ものの可能性もある。以下、No.別に記載内容を見ていくことにする。便宜的に、No.の付されている面をNo.□-1として、その裏面をNo.□-2とする。

○ No.1-1 (立松宏君談)【赤字】

知多郡師崎町大字大井字入道(通称天神山)
非貝塚
包含層厚約1m
-70cm位で5~10cmの中間層を挟在して
上下両層に分層される。
機械的に9層に分層し最下部118cm。
上下両層を通じて尖底

○ No.1-2・No.2-1

Ist 耕作土 -10cm 小破片多し。
II nd 黒色粘土(炭化物多し) 破片大型となる。
III rd 黒色粘土(粘土力強くなる)
-25cm 鹿角
IV th 下端 -40cm IIIに同じ
V th 遺物少なくなり礫多くなる。
(厚5~10cm)

* この調査メモの筆跡については、岩野見司先生から、澄田正一先生によるものである、との見解を頂いた。

VI th 遺物多くない

下辺部より小兒頭大の礫塊不規則出土
-55cm

VII th 褐色土層 爪形文土器多くなる。

VIII th 同上

IX th 突帶(圧痕)多くなる。 地盤は岩盤の凹凸あり。

○ No.2-2

丘陵突端付近で

丘陵をはさんで

東西の斜面にあり。

西を第I地点 東を第II地点

付近にておせんべい土器片採集

scraper(硬砂岩 chert) 3

無茎石鏃(chert) 1

下層-早期末【赤字「子母口式」を消す】

上層-前期初【赤字「茅山式」を消す】

○ No.3-1

知多郡師崎町大字大井字小海田 コカイダ

上田公治氏採集品

角形土器 須恵器 常滑焼 水神平 土師器

同氏 天神山遺跡出土品

鹿骨角多シ 貝塚ヲ伴ワズ

【土層断面模式図】

○ No.3-2

12月27~28日

測量(楨崎・立松・紅村)

27日 幻燈二より座談会

1月4~8日

発掘(澄田・楨崎・紅村・立松・大参)

4日 午前到着 午後より発掘

8日 午后報告会(大井町ニテ)

○ No.4-1

遺物保管場所 師崎中学校(磯部幸男教官)

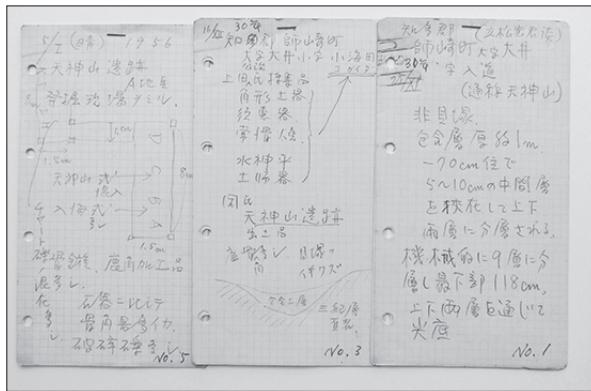
【遺跡位置略図】

○ No.5-1・No.5-2・No.6-1

5/I【1月5日のことか】(晴) 1956

天神山遺跡A地点 発掘現場ヲミル

【グリッド配置図:図6】



天神山遺跡調査メモ_ もとの状態
No.1 ~ 2、No.3 ~ 4、No.5 ~ 7
で綴じられていた

天多郡立松岩村
市崎町大井
30m、字入道
27.11 (通称天神山)
非貝塚
包含層 厚約1m
-70cm位で
5~10cmの中間層
走査在して上下
兩層に分層され
木根腐れに9層に分
層(最下部)118cm
上下兩層互通
尖底

Ist 稲作土 - 10cm
小石子多し。

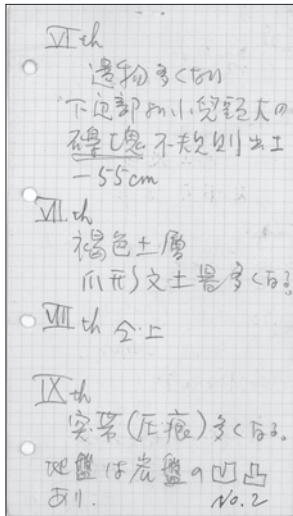
IInd 黒色粘土
(炭化物多し)
石子(大粒)とる。

IIIrd " (粘着力強(なま))
- 25cm 底骨。

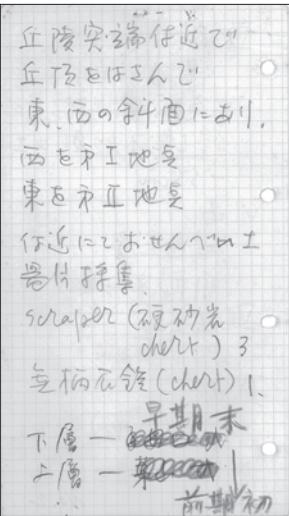
IVth 下端 - 400cm
III (= 土) "

Vth 遺物土 (cm)
石子多(なま)。(厚5~10cm)

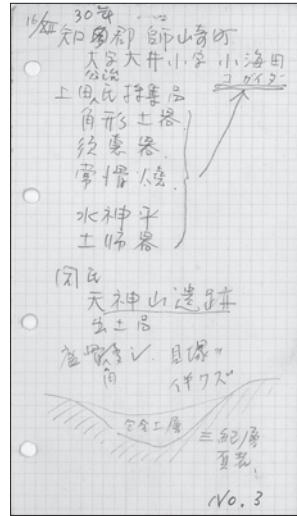
No.1-2



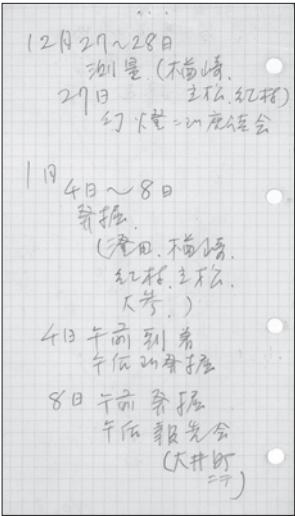
No.2-1



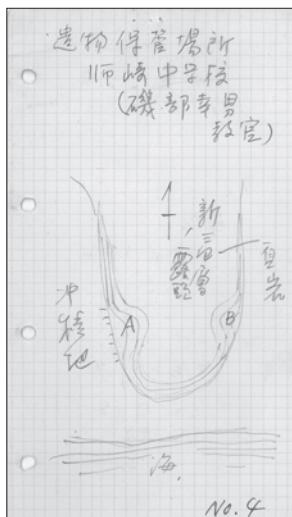
No.2-2



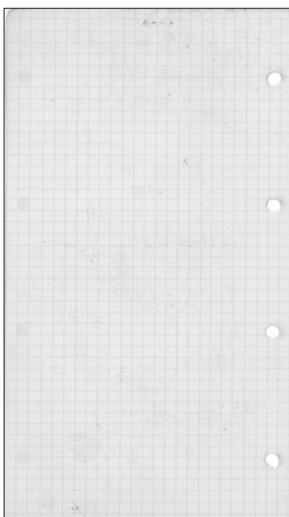
No.3-1



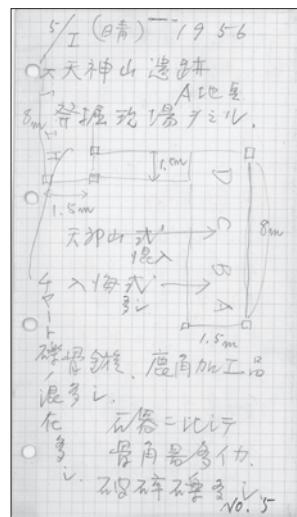
No.3-2



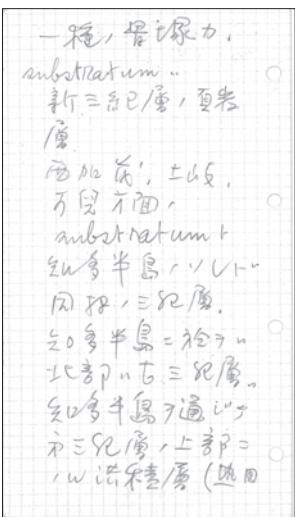
No.4-1



No.4-2



No.5-1



No.5-2

図4 天神山遺跡調査メモ 1

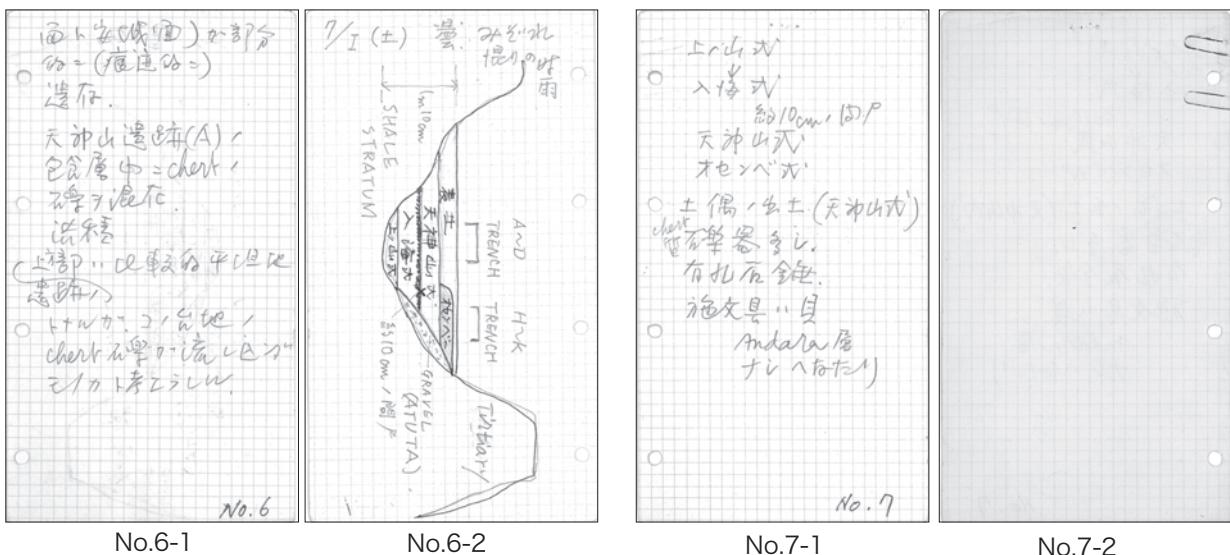


図5 天神山遺跡調査メモ2



図6 天神山遺跡 1956年調査風景写真 (岩野 2002 より)

骨鏃・鹿角加工品多シ
石器二比シテ骨角器多イカ
破碎礫多シ
一種ノ骨塚カ
新三紀層ノ頁岩層
西加茂・土岐・可児方面ノ nubst ratum ト
知多半島ノソレトハ同様ノ三紀層。
知多半島二於イテハ北部ハ古三紀層。
知多半島ヲ通ジテ第三紀層ノ上部ニノル洪積
層（熱田面ト安城面）ガ部分的ニ（痕跡的ニ）
遺存。
天神山遺跡（A）ノ包含層中ニ chert ノ礫ヲ
混在。
洪積
遺跡ノ上方部ハ比較的台地ノ chert 磕ガ流レ
混ンダモノカト考エラレル。

○ No.6-2・No.7-1
7/I【1月7日のことか】
曇 みぞれ混りの時雨
【土層断面模式図】
上ノ山式
↓
入海式
約 10cm ノ間層
天神山式
オセンベ式
土偶ノ出土（天神山式）
chert 質礫器多シ
有孔石錘
施文具ハ貝 Anadara 属 ナシ へなたり

以上、内容を概観した。

No.1-1～No.3-1までは、1956年1月の調査に入る前の記録ではないかと推測され、特にNo.1-1～No.2-1は、1955年8月の試掘調査の成果である可能性がある。No.2-2では遺物採集地点が2箇所あること、No.3-1は上田の採集資料の記録で、遺跡発見時の様子が記されているといえる。

1956年の調査記録としては、No.3-2～No.7-1が当たると考えられる。No.3-2は、天神山遺跡1956年調査の日誌に当たる内容が記されている。No.4-1には、天神山遺跡の位置略図記されている。No.2-2で、第I地点としたものがAに、第II地点としたものがBと記されている。発見当初、入道遺跡として紹介されたこの遺跡が、昭和30年12月に文化財保護委員会宛に出された発掘届け(図7)では、「天神山遺跡」と呼称されるに伴い、天神山遺跡A地点と天神山B地点という名称になった。

No.5-1～No.7-1は、1月5日および7日に、調査の経過と所見が記されたものである。No.5-1には、調査区の配置図が記されている。幅1.5m・長さ8mのトレンチが東西方向に2本設定されたことは知られていたが(岩野2002)、この調査メモによって、トレンチの中が、それぞれA～DとH～Kの区に分けられていたことが判明した。恐らくA～Dの方が第Iトレンチ、H～Kの方が第IIトレンチであろう。この調査メモには両トレンチ間の距離の記載は無いが、トレンチ設置方向(東西方向)に幅1.5mの横長の区域が設定されていたようである。筆者はこの区画も調査トレンチ

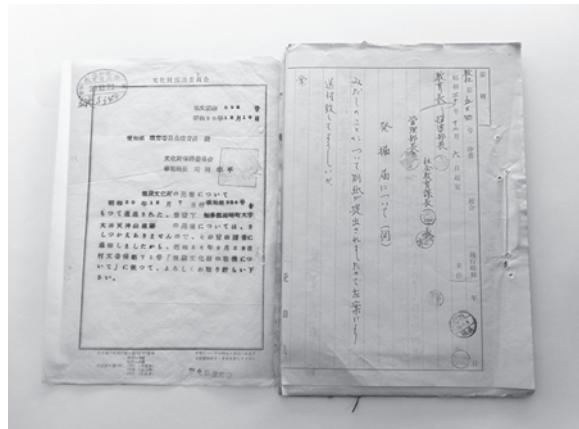


図7 天神山遺跡1956年調査発掘届関係書類写真

ではなかったかと、推測している。その理由は以下の3点である。1点目の理由は、調査メモに記されていた区画の形状である。2点目の理由は、現状ではE～Gの区の記載が欠落している点である。3点目の理由は、調査風景を記録した岩野見司先生の写真(図6左)にある。この写真は、第Iトレンチ(A～D区)を中心として南東方向から撮影されたものと考えられる。写真の中央左側付近で、トレンチが90度クランクした状態で掘削されており、その長さは少なくとも4m以上はあったものと推測される。すなわち第IトレンチD区に向かって直交方向にも掘削された調査トレンチであった可能性が高い。そのトレンチの規模については確実な証拠はないが、E～Gの3区分であったことを想定すると、長さは6mであった可能性があろう。以上のことと踏まえて、図8に想定される調査トレンチ配置図を示しておく。

遺跡の所見については、熱田層相当の第三紀層で形成された凹地形に土器・石器・骨角器の包含があり、一種の骨塚ではないかとの所見が示されている。包含層中にはチャート礫が多く混在しており、台地上方からの流れ込みであろうと推測している。土器については、上ノ山式→入海式→約10cmの間層→天神山式→オセンベ式が層位的な関係をもって出土したと記されている。

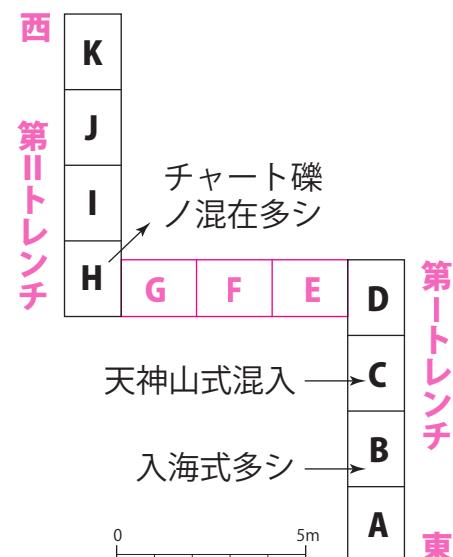


図8 天神山遺跡調査トレンチ配置想定図

No.6-2 には、調査成果を踏まえた土層断面模式図が記されている。この模式図は野帳のマス目を用いて記されたもので、用紙に入るよう縦横変倍の状態となっていた。この縦横変倍を等倍にして、上述したトレンチの位置を補正したものが図9で、凹地の南北断面を西側からみた図となっている。調査時の層序については以下のように言われている（岩野 2002）。

○第Iトレンチ

第1層：表土および粘性の強い黒色土（層厚約50cm、土器・石器・骨角器多量包含、層下部には多量の魚骨）

第2層：砂混じりの土層（層厚10cmほど、土器の包含少ない）

第3層：粘性の強い黒色土層（層厚約40cm、土器・石器・骨角器包含）

第4層：地山（岩盤）

○第IIトレンチ

表土および第1層：礫混じりの褐色土層（層厚約30cm、多量の土器・石器・獸骨・魚骨を含む）

第2層：第Iトレンチ第1層土器少量出土

Iトレンチ第1層は天神山式の層で第IIトレンチ第2層と同一、第2層は間層、第3層が入海式・上ノ山式の層にあたる。第IIトレンチ第1層はオセンペの層に相当する。

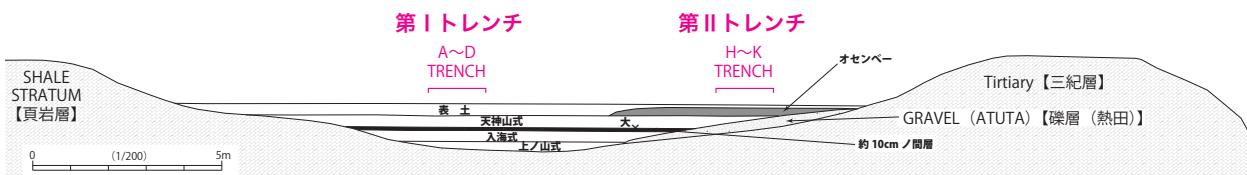


図9 天神山遺跡土層断面模式図（調査メモNo.6-2を補正）

参考文献

磯崎幸男 1984 「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1.1～28頁 知多古文化研究会
磯崎幸男・杉崎 章・紅村 弘 1965 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41.1～12頁 古代学研究会
岩野見司 2002 「天神山遺跡」『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』245～251頁 愛知県
川添和暁 2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム』24.考古学フォーラム編集部
紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡 総括編』 名古屋鉄道
山下勝年ほか 1997 『南知多町誌 資料編6』 南知多町

4. おわりに

本稿では天神山遺跡の調査メモを報告して、調査の方法や経過について可能な限りの復元を試みた。これまで文字記録のみであった内容について、視覚的に追検証することができた。これによって天神山遺跡出土資料について、遺物の注記をたどることで、遺跡との関連で検討することができるようになったといえる。

天神山遺跡の立地する段丘上には、天神山B遺跡・塩屋遺跡の所在が知られている（図10）。これらはそれぞれ活動の場とする遺跡群として捉えられるものであるが、そのためにも、各遺跡の内容について詳細に検討を行わなくてはならないと考えられる。

天神山遺跡の調査が行われて60年が経過している。本遺跡が、当地域を代表する縄文時代早期末の標識遺跡であることからも、今後も継続した調査研究が必要になるといえよう。

（川添和暁）

本稿を草するに際し、以下の方々からのご教示・ご配慮を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

岩野見司・江崎 武・梶原義実・紅村 弘・杉本真由・山本直人



図10 天神山遺跡・塩屋遺跡の位置と天神山遺跡調査トレンチ位置想定図